

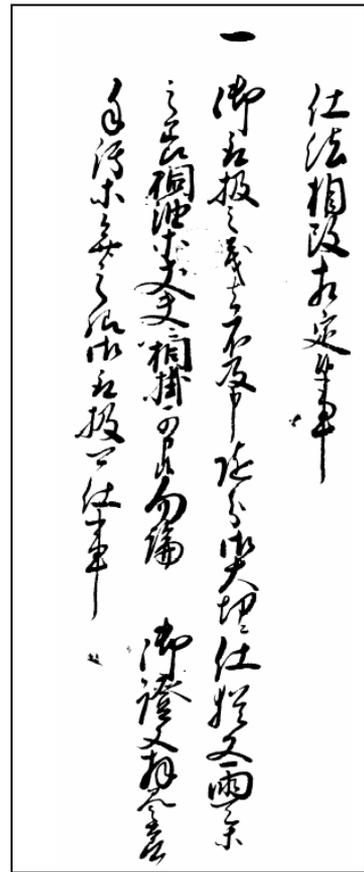
より崩された字に慣れる

前回の続きが少し残ってしまいました。



(l)

(l)は最初の^おが、この文書に入ってから一番崩れている「相」です。しかし、第3回や第4回に出てきた^おと比べると、同じ崩し方だとわかります。次の^定は、「定」。次が何文字あるのか判りにくいですが、^事が「候」で^事が「事」です。本当は、やや画数が多い気もしますが。



次の一条に入ります。(m)は、最初が「御」。次の^おが、

何度か出てきた「取」です。次の^扱もほとんど崩れていなくて「扱」なので、ここまでは「御取扱」となります。次の^之は、「之」だろうという予想を立てて、次の次の^義を見ると、これが難しい字です。

は「御取扱」となります。次の^之は、「之」だろうという予想を立てて、次の次の^義を見ると、これが難しい字です。



(m)

第8回と第21回に出てきた^後の^{つくり}と同じ字、と言ってもよくわからないかもしれませんが、「義」という字です。「^義の義」「^儀の儀」と両方の「儀(義)」を使います。第24回でも触れましたが、「読み」が同じなら、使う字は余りこだわらないのです。

次の^者も難問で、これは第17回でも^者と出てきた「者」という字で、「者(は)」と読みます。今回の方が崩れていますが、今回の方がよく出てくる崩しです。ここまでの「御取扱之^義者」となります。

次の^不は「不」。^及は「及」。^申は「申」にも見えますが、「申」です。3文字つなげると「不及申」となります。では、これはなんと読むか、ということになりますが、「不及申」で、「申すに及ばず」と読みます。これも割とよく出てくる言い回しですから、覚えておくと便利です。